

巻頭によせて

校長 北 村 聡

Kitamura Satoshi



人間は素晴らしい能力を持っています。「善の研究」で有名な哲学者、西田幾多郎はその著書の中で「夜空に輝く星、その実体は灼熱した岩石である。野に咲く花々も、細胞の集合体に過ぎない。しかし、人はそれを見て美しいとすることができる。」という意味のことを述べています。つまり何に接するにせよ、要はその感じ方であるということです。

我々は、例えば大小の自然や芸術作品を見、音楽を聴いてそれを美しいと感じ、また文学に接し、スポーツを観戦することで安らぎや感動を味わうことができます。しかし、日々の多忙の中で、ともすれば身の回りにある美しいものや、知的好奇心をかき立ててくれるもの、感動させてくれるものに無関心になりがちです。本当は遠くまで出かけてゆかずとも、多額のお金をかけずとも、身近な所にそれらを発見し、味わうことができるはずですが、禽獣たちが、何かを見て美しいと感じたり、感動したりすることがあるのかどうかは判然としませんが、少なくとも人間にはそういう能力が備わっておることにあらためて感謝するべきでありましょう。

また、ある人にとっては何でもないことでも、他の人にとっては熱中の対象として、仕事であれ、趣味であれ、その人の人生にとって無くてはならないものであるというのも、人間に備わったこれも感謝すべき現象です。特に日本の文化はその卓越して繊細な「感受性」の支配する所より大きな影響を受けながら成長してきました。万葉の桜に秋の紅葉、雪景色、果ては夕暮れの枯れ枝にとまる一羽の鳥の姿にさえ美しさを感じ、自分の人生に重ね合わせて、感動してきたのです。

今日、激しい競争社会、情報化社会、能率主義の時代にあって、多くの人々が心の余裕を失い、その事が若者の価値観を混乱させ迷いを惹起させています。このような時代にあってこそ本来人間に備わった感受性を発揮し、時々立ち止まっては美しいものに目をとめ、また、少しでも自分の熱中できるものの内に時を過ごす時間を大切にしなければならないと感じる昨今です。